

「生活にいかす力」を育てる家庭科の授業づくり

— 問題解決的な視点から生活につながる学習活動を通して —

鈴木南津恵¹

高等学校家庭科では、より良い生活を送るための実践的な態度の育成が求められている。生活の充実・向上を図るためには、生活の中から課題を見だし、それを解決する問題解決能力の育成が必要と考える。本研究では、生活課題を解決するために必要な知識・技能の習得から、問題解決的な生活につながる学習活動を取り入れた授業展開を行うことにより、生徒の「生活にいかす力」を育てることができると考え、検証を行った。

はじめに

近年の急激な社会の変化は、私たちの暮らしに様々な影響を及ぼしている。グローバル化や情報化等により、私たちの生活は便利で豊かになった一方、家族・家庭生活が多様化し、生活体験の不足や基本的な生活習慣の乱れ等の問題が指摘されている。今後、社会が更に大きく変化していくことで引き起こされる様々な生活上の問題に対応する力が私たちに求められている。

高等学校学習指導要領解説家庭編(以下、「解説家庭編」という)の教科「家庭」の目標には「生活を創造する能力と実践的な態度を育てる」(文部科学省 2010 p. 7)と明示されている。また、2012年の国立教育政策研究所の調査によると、高校一年生の約80%が、「家庭科は将来生きていく上で重要だ」と回答している。さらに、2015年の中央教育審議会教育課程企画特別部会論点整理補足資料では、「家庭科は実生活に役立つ」、「学習してよかった」と生徒は家庭科を肯定的に捉えている(中央教育審議会 2015 p. 124)。

このように、家庭科は生活と密接に関連し、生活を充実・向上させる教科である。しかし、家庭科の授業が知識・技能の習得のみに止まり、自分の生活の学習として考える生徒が少ない現状が、これまで取り組んできた日頃の授業から推測される。

本研究では、「生活にいかす力」を家庭科の授業で学んだことを生活で活用する力と捉えた。家庭科の授業と生活を結び付ける問題解決的な学習活動を行い、生活での実践につなげることで、「生活にいかす力」を育てることができると考えた。

研究の目的

本研究は、生徒の生活を充実させることを目的に、家庭科の授業において、知識・技能の習得を通じた問題解決的な学習活動を行うことにより、「生活にいか

す力」を育てることを目指した。

研究の内容

1 研究の背景

(1) 家庭科の課題と改善の方向性

2016年の中央教育審議会教育課程部会家庭・家庭ワーキンググループにおける審議の取りまとめには、知識・技能を活用して生活の課題を解決する能力の習得が十分でないことが家庭科の課題として挙げられている。

また、その改善策として、「生活の科学的な理解を深め、知識・技能を定着させるとともに、それらを活用して生活の課題を解決する問題解決的な学習を体系的に進め、一層充実させること」としている。

さらに、家庭科の課題について土屋は、「高校生は家庭科学習の必要性は認識しているものの、具体的にどのような学習内容が自分たちの生活と関係しているのかという理解が不足しており、自分の生活とつながっているということを根拠とした必要性を感じていない」(土屋 2015)と述べている。

つまり、生徒は家庭科の授業を日常生活と切り離して考えていることが多く、家庭科の授業で学んだことをいかして、自分の将来や現在の生活を創造する力が弱いと考えられる。

(2) 生徒の実態

平成28年7月に神奈川県立大井高等学校2学年212名を対象に事前アンケートを行った。家庭科の授業は生活の役に立つかの問いに、「とても思う」という生徒が43.8%、「やや思う」という生徒が44.3%で全体の88.1%となり、先の国立教育政策研究所の調査と同様、家庭科を肯定的に捉えていることが分かった。しかし、家庭科の授業で学んだことを実際に生活の中で実践しているかの問いでは、「いつも実践している」という生徒が5.6%、「ときどき実践している」という生徒が24.7%であり、家庭科の授業で学んだ内容が生活上での実践とつながりがないことが分かった。

さらに、自分の生活の課題についてどのように考え

1 神奈川県立大井高等学校
研究分野(授業改善推進研究 家庭)

ているかの問いには、「生活課題がよく分からない」という生徒が20.1%、「課題解決への実践はしていないが、生活課題は理解している」という生徒が27.3%、「生活課題はない」という生徒が5.2%と、合わせて52.6%となった(第1表)。このアンケート結果から、様々な生活課題の中から自分の「生活課題」を捉える力が弱い生徒が学年の約半数いることが分かった。

したがって、問題解決能力の育成の前に、生活課題を捉えさせる手立てが必要であることが確認できた。

第1表 自分の生活課題についての意識(n=194)

質問項目	事前(%)
生活課題を理解し、課題解決に向けて実践している	10.3
課題解決への実践はしていないが、生活課題は理解している	27.3
生活課題の解決策が見つからないが、生活課題は理解している	8.8
生活課題がよく分からない	20.1
生活課題について考えたことがない	27.3
生活課題はない	5.2
その他	1.0

(3) 指導の方向性

家庭科の学習の実践について吉原は、問題によっては個人で解決できないことがあり、個人の努力でできそうな工夫でも、家庭生活の事情で子どもの実践が左右されると述べている(吉原 2010 p.13)。

家族・家庭生活が多様化し、生活体験が不足したことから、生徒自らの生活体験による知識・技能のみでは、思考の広がりや深まりに限界がある。それを補うために、まず問題解決に向けた知識・技能の習得が必要である。

そして、課題を他の生徒と共有し、身に付けた知識・技能を活用し、協働的に問題解決することで、家庭科の学習内容を多角的に捉え、自らの生活の中で実践することができると考えた。

2 研究の仮説

家庭科の授業で学んだことを生活に活用する力、すなわち「生活にいかす力」を育てるために、知識・技能を習得し、生活の中から課題を見だし、それを解決する問題解決能力の育成が必要だと考えた。そこで、生徒の生活実態に即した実践への具体的な手立てを取り入れた問題解決的な学習活動を行うことにより、生徒自らの生活が充実し、向上すると考え、次の仮説を立てた。

仮説

生活課題を意識した問題解決的な学習活動を取り入れた授業を展開することで、生徒に家庭科の授業と生活とのつながりを認識させ、「生活にいかす力」を育てることができる。

3 研究の方法

研究の方法として、ホームプロジェクトにより、授

業と生活のつながりを実感させた上で、検証授業を行い、問題解決的な学習活動を通して「生活にいかす力」を育成することとした。次に、「生活にいかす力」を育てる方法と研究の構想を示す。

(1) 「生活にいかす力」とは

本研究では「生活にいかす力」を、「創造性」と「実践する力」の面から検討した。

ア 創造性

「創造性」について筒井は、身に付けた知識・技能を活用して主体的に解決しようとする中で育むことができるものであり、新しい価値あるものを創り出すことと捉えている。「創造性」を育む学習指導については、問題解決的な学習の「課題を見付ける」段階で、子どもの興味や関心を大切に、考えを自由に出し合い、実現できる具体的な考えをまとめることで課題を解決できるようにすることが重要だと述べている(筒井 2016)。

つまり「創造性」とは、生活の充実・向上への意欲を高め、工夫・改善に取り組むことで、生徒が自らより良い生活を創り出すことであると考えられる。

このことから、生徒の問題解決への意欲が高まる身近な題材を取り上げ、具体的な生活に関連付け、生徒が実践可能な学習内容とすることにより、「創造性」を育むことができると考えられる。

イ 実践する力

「解説家庭編」に「実践的な態度とは、学習で得たものを実際の生活に活用する態度であり、生活の各場面面で課題を見だし、その解決を図りながら、家庭生活や地域の生活の充実向上を果たす態度である」(文部科学省 2010 p.8)と示されている。

そして実践的な学びについて吉原は、日常生活で継続的にいかされること、また家庭科の学習の到達点は限られた期間で完結するのではなく、長期的に学習の課題を探求し、生活を振り返り評価することに意義があると述べている(吉原 2010 p.207)。

つまり、家庭科の授業を具体的にどのように生活にいかしていくかを示し、継続的に取り組むことのできる題材を提示することにより、「実践する力」を育むことができると考えられる。

(2) 研究の構想

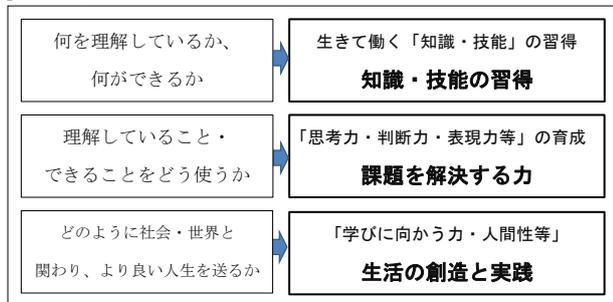
次に、検証に向けての研究の構想を示す。

ア 学力の3要素との関連

2016年の中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」は、求められる資質・能力を確実に育むことができるよう、育成すべき資質・能力の三つの柱として、「何を理解しているか、何ができるか(生きて働く『知識・技能』の習得)」、「理解していること・できることをどう使うか(未知の状況にも対応できる『思考力・判断力・表現力等』の育成)」、

「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか(学びを人生や社会に生かそうとする『学びに向かう力・人間性等』の涵養)」を挙げている(中央教育審議会 2016 pp. 28-31)。

さらに、「家庭科の学習過程のイメージ」から三つの要素を「知識・技能の習得」、「課題を解決する力」、「生活の創造と実践」と捉えた(中央教育審議会 別添資料 p. 64) (第1図)。



第1図 学力の3要素との関連図

イ 授業の構成

岡崎は問題解決的な学習活動について、生徒が「分かる」ことから視野を広げ、課題に自ら「気付く」ことができ、再び「分かる」ことから「考える」ことで、より良いものへと工夫し創造する(つかう)ことと述べている(岡崎 2014)。前述の岡崎を基に、授業の構成を提案する(第2表)。

第2表 授業の構成

1 分かる	分かることから視野を広げる。 ※問題解決に必要な知識を意図的に教える授業の提示
2 気付く	生活課題に気付く。 ※生活課題に気付く授業の工夫
3 考える	より良いものへ工夫し創造する。 ※問題解決的な学習・協働的問題解決
4 創造する(つかう)	実践する。 ※継続的に実践できる授業の提示

4 検証の方法

ホームプロジェクトと検証授業を行い、研究の仮説と研究の方法の有効性について、次の検証結果から分析・考察する。

(1) 生徒の振り返り

中村によれば、生徒の思いの深まりや広がり方は一人ひとり異なるので、関心・意欲・態度は、ねらいの方向への到達度で判定している(中村他 2006 p. 29 p. 91)。本研究では2回の検証授業で生徒の変容を見るため、ワークシートの記述内容から検証する。

(2) 事前・事後アンケートの調査結果

事前・事後アンケートの調査結果を分析し、検証授業後の生徒の学習意識の変容を分析・考察する。

(3) インタビューの調査結果

ワークシートの取組状況や振り返りと事前・事後アンケートの調査結果から、生活意識や態度に変容が見

られた生徒と、変容が見られなかった生徒へインタビューすることで、より具体的な生徒の変容を分析する。

5 ホームプロジェクト

「解説家庭編」には、ホームプロジェクトとは「各自の生活の中から課題を見だし、課題解決を目指して主体的に計画を立てて実践する問題解決的な学習活動である」(文部科学省 2010 p. 34)と示されている。

検証授業の前に、問題解決的な学習であるホームプロジェクトを家庭で実践させた。この目的は、家庭科の授業と生活のつながりを実感させ、生徒の生活実態を把握することにある。

- (1) 実施期間 平成28年度 夏季休業中
- (2) 対象生徒 神奈川県立大井高等学校2学年(212名)
- (3) 課題名 「食事の記録と料理にチャレンジ！」
- (4) 課題の目標

- ・ホームプロジェクトについて関心を持ち、主体的に学習活動に取り組む。
- ・食生活上の課題を見だし、その解決を目指して、取り組む。

(5) 課題の学習活動

1 食事の記録(3日間)
・いつ誰と何を食べたか、詳しく記入する。
・食事の記録から食生活を自己採点し、点数の理由と食生活で改善したいことを記入する。
2 料理にチャレンジ
・3日間の食事の記録を踏まえて、食生活の改善につながる料理を考え、調理する。(1食分)
・家族(家族以外も可)と一緒に試食し、感想を聞く。
3 振り返りと自己評価
・全体の振り返りと感想を記入する。
・食事の記録から食生活上の課題を見だし、自分で調理することにより、食生活が改善できたかを自己評価する。

(6) ホームプロジェクトから見えた生徒の実態

自己採点100点の生徒			自己採点80点の生徒		
1 日 目	朝	お茶漬け (1人)	1 日 目	朝	食パン (1人)
	昼	カップラーメン (妹)		昼	ラーメン (1人)
	夕	ハンバーグ・サラダ スープ (家族)		夕	カレー (4人)
2 日 目	朝	お茶漬け (1人)	2 日 目	朝	ヨーグルト (1人)
	昼	そうめん (1人)		昼	チャーハン (1人)
	夕	味噌汁・干物・漬物 ご飯 (1人)		夕	天丼 (1人)
3 日 目	朝	お茶漬け (1人)	3 日 目	朝	食パン (1人)
	昼	カップラーメン (親)		昼	オムライス (4人)
	夕	そば (家族)		夕	欠食

第2図 生徒の「食事の記録」

ホームプロジェクトを提出した120名のうち、3日間の食事の記録に「孤食」の回答がある生徒は全体の80%、「欠食」があった生徒は全体の56.3%、「間食」があった生徒は全体の65.8%であることが分かった。食生活の自己採点の平均点は52.6点で、70点以上の生徒は全

体の27.5%だった。ここで、食生活の自己採点の点数が高い生徒の食事の記録を示す(第2図)。

これらは、栄養バランスや欠食・孤食等の点からすると、食事内容や食習慣が十分であるとはいえない。

つまり、第2図の2人の生徒のように、生活課題をきちんと捉えることができていない生徒が少なからずいることが分かった。

また、食生活で改善したいことの内容は、野菜嫌いや偏食(41人)、次いで栄養バランス(26人)、一日三食の食事(15人)の順であった。

これらの結果が生徒の食生活の日常的な課題であると捉え、検証授業に取り入れることとした。

6 検証授業

(1) 実施期間 平成28年10月5日(水)～31日(月)

(2) 対象生徒 神奈川県立大井高等学校

第2学年4組32名 第2学年6組33名

(3) 授業時数 4時間(2時間連続の授業×2回)

(4) 題材名・題材の目標

<p>第1回検証授業(1, 2時間目)</p> <p>題材名 「食生活スペシャリスト」になろう</p> <p>題材の目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・食生活に関心を持ち、基本的な知識を身に付けることで食生活の大切さを理解する。 ・基本的な知識を身に付けることで、食生活を振り返り、生活課題を見だし、それを明確にする。
<p>第2回検証授業(3, 4時間目)</p> <p>題材名 「ひょうたん食堂」を救う ～イチオシメニューの提案～</p> <p>題材の目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・食堂(メニュー)の課題を見だし、その課題を解決した献立を考えることで問題解決能力を育む。 ・自分の食生活を振り返り、生活課題を見だし、解決策を考え、実際に生活の中で実践する。

(5) 検証授業の構想

第1回検証授業は「分かる・気付く」という視点から、知識・技能の習得を目的に実施し、第2回検証授業は「考える・創造する(つかう)」という視点から、課題を解決する力の育成及び「生活にいかす力」である創造性と実践する力を身に付けることを目標にして展開した(第3図)。

授業	第1回検証授業	第2回検証授業
視点	分かる・気付く	考える・創造する(つかう)
構造	知識・技能の習得	課題を解決する力
		生活の創造と実践

第3図 検証授業の構想

(6) 各時間の学習活動

ア 第1回検証授業

「食生活スペシャリスト」という食分野の知識や食

の大切さを伝える架空の専門家になるという目標を立て、授業の終わりに検定試験と題して、小テストを実施する。小テストは生徒全員が合格できる内容とし、第2回検証授業へつなげる。第1回検証授業で、「生活にいかす力」を育てるために、基礎的な知識・技能を習得させる。授業の内容は、食事の役割や五大栄養素の働き等、生徒の関心・意欲を高める身近な題材の導入や、生活実態を踏まえたものとする。

イ 第2回検証授業

架空の食堂を設定し、現代の食生活の問題に悩む店主のつぶやきと「ひょうたん食堂」のメニューを基に、食生活スペシャリストの視点で問題点を見だし、食堂の危機を救う改善メニューを考えさせる。メニューの条件は、店主のつぶやきと改善を必要とするメニューから最低一つ改善すること、一汁三菜形式、神奈川の食材を必ず取り入れることとする。

まず、生徒は個人で改善メニューの提案をした後、グループで共有する。個人の提案を基に、より良いメニューをグループで考えて、発表する。

次に、自分の食生活を振り返り、食生活の問題点や改善したいことを考える。グループで、食生活での改善したいことを共有し、食生活スペシャリストの視点で互いの食生活の解決策を考え、付箋に書き、互いにアドバイスをし合う。そのアドバイスを参考に、「今からできること(解決策)」を考え、実際に生活の中で実践する。食生活実践チェック表に実践記録を8日間記入することで「今からできること(解決策)」を習慣化する。食生活実践チェック表は、以下の内容とする。

食生活実践チェック表の内容

- 1 「今からできること(解決策)」を実践したか、実践できなかったかを記入する。
- 2 現在の体調が良い、普通、悪いかを記入する。
- 3 実践の記録・感想を書く。

(7) 検証授業の具体的な工夫

ア 学習活動の工夫

学習活動を円滑にするため、第1回検証授業ではペアワークを中心とし、第2回検証授業はグループ活動を実施する。

第1回検証授業では、知識・技能を活用して、問題解決できるように、意図的に教える。また、関心・意欲を引き出すために、小テストの合格により自己肯定感を高める。

第2回検証授業では、第1回検証授業で身に付けた知識・技能を活用して、個人で考え、グループ活動で共有させた後、再び個人で振り返り、思いや考えを広げ、さらに深めさせる。そして、より良いアイデアが出るように、課題を他の生徒と共有し、アドバイスをし合うことにより、協働的に問題解決を図る。

イ 生活につなげる工夫

第2回検証授業では、食堂の店主のつぶやきと改善

を必要とするメニューに、現代の食生活の問題があり、私たちの生活課題と同じであることに、気付かせる。食堂の改善メニューを考えることが、実は自分の食生活の改善にも通じることであり、自分の食生活も容易に改善できるということを捉えさせる。このことを通して、生徒自身の食生活の振り返りにつなげる。生活で実践する目標を「今からできること(解決策)」と具体的に生徒に提示して、実際の生活の中で活用させることにより、生徒の生活につなげる。

7 検証結果の分析・考察

(1) 振り返りによる生徒の変容

食生活実践チェック表の振り返りでは、「今からできること(解決策)」の実践から、生活の充実・向上への効果が出た生徒を確認できた(第3表)。また、実践の継続はできなかったものの、なぜできないのかを考えることができた生徒も見られた。

第3表 「食生活実践チェック表」の生徒の記述

<ul style="list-style-type: none"> 継続できた。自分の食事が大切だと気付くことができた。毎日食事をして体調が良くなった。 朝食と夕食、そして野菜もしっかり食べられたので良かった。 最初は継続できたが、土日に入ると続かなくなった。 前日に早く寝られなかったりすると朝起きられなくて朝食を食べなかった。
--

また、授業の終わりの振り返りに、「食生活に限らず、心も体も健やかで充実したより良い生活を送るためにはどうしたら良いか」を考えさせた。第1回検証授業から第2回検証授業で、食生活向上への意識の深まりや広がり確認できた(第4表)。

第4表 「より良い生活を送るためにどうしたら良いか」の生徒の記述

生徒A	<p>第1回：自分の食事を考えることが大切だと思った。</p> <p>第2回：早起きをして時間に余裕ができて遅刻が減った。体調が優れ気分も良くなった。継続して続けることは良い。</p>
生徒B	<p>第1回：朝食、夕食のどちらも食事を抜いているのでしっかり食べたいと思う。</p> <p>第2回：野菜を摂ることで健康的になったので、肌にも良いと思った。朝食と夕食を食べることで朝は頭の回転が良くなり、夜はしっかり寝られるようになった。健康的に過ごすため3食食べないといけないと思った。</p>

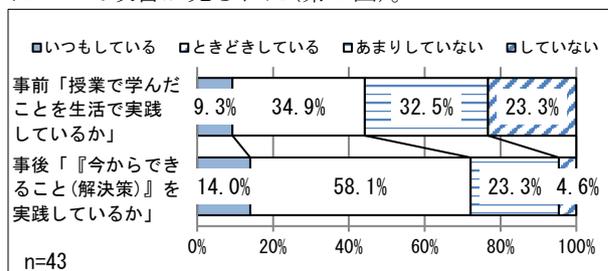
(2) 事前・事後アンケートによる生徒の変容

事後アンケートは検証授業を実施した対象クラスの有効な回答ができた45名の生徒に行った。

第5表 自分の生活課題についての生徒の変容(n=43)

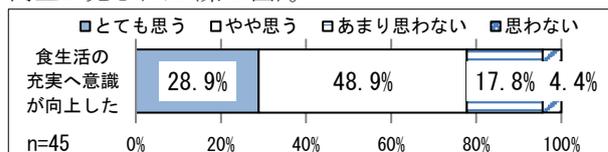
質問項目	事前(%)	事後(%)
生活課題を理解し、課題解決に向けて実践している	9.3	27.9
課題解決への実践はしていないが、生活課題は理解している	20.9	23.2
生活課題の解決策が見つからないが、生活課題は理解している	2.3	14.0
生活課題がよく分からない	30.2	11.6
生活課題について考えたことがない	25.6	14.0
生活課題はない	7.0	7.0
その他	4.7	2.3

自分の生活の課題についてどのように考えているかの問いでは、「生活課題を理解し、課題解決に向けて実践している」という生徒が、事前アンケートの9.3%から事後アンケートでは27.9%に増加した(第5表)。そして、「生活課題がよく分からない」、「生活課題について考えたことがない」という生徒がそれぞれ減少した。次に、事前アンケートの家庭科の授業で学んだことを実際に生活の中で実践しているかの問いでは、「いつもしている」という生徒が9.3%、「ときどきしている」という生徒が34.9%だった。一方、事後アンケートの授業で考えた「より良い食生活を送るために今日から実践すること(食生活の解決策)」を実際に生活の中で実践しているかの問いでは、「いつもしている」という生徒は14.0%、「ときどきしている」という生徒は58.1%という回答率であった。これらのデータから、家庭科の授業で学んだことを生徒の生活にいかすことについて改善が見られた(第4図)。



第4図 家庭科の授業で学んだことを実際の生活で実践している生徒の変容

4時間の検証授業で食生活の大切さを理解し、食生活の充実・向上への意識が変化したかの問いでは、「とても思う」という生徒が28.9%、「やや思う」という生徒が48.9%で全体の77.8%であり、食生活への意識の向上が見られた(第5図)。



第5図 食生活の充実向上への意識の変化

(3) インタビューによる生徒の変容

事後アンケート後、11人にインタビューを実施した。第6表に生徒の回答の一部を示す。

第6表 インタビューの生徒の回答

生徒1：授業で自分の食生活が改善できることを知り、実際に改善できた。(偏食の改善)
生徒2：今までの夕食は週に4～5日コンビニ弁当を一人で食べていた。授業後、家族と食べるようになった。
生徒3：グループ活動で人の意見を聞いて、自分の意見と比べて違うと感じた。友達の良い意見も良かった。
生徒4：前から食事の偏りに気付いていて、普段から意識していたので、食への意識の向上は感じなかった。
生徒5：今更食生活を変えるのは難しい。家族全員が朝食を摂る習慣がない。

振り返りや事前・事後アンケートの調査結果により、思いや深まりが確認できた生徒1と生徒2は、具体的

に生活にいかし、食生活の改善ができた」と回答している。生徒3の回答からは、グループ活動の有効性がうかがえる。しかし生徒4のように、普段から食生活を意識している生徒に変容は見られなかった。また、生徒5の回答のように、家族・家庭生活は様々であり、生徒個人では解決できない問題があることも分かった。

研究のまとめ

1 研究の成果

本研究の「生活課題を意識した問題解決的な学習活動」から、生徒は家庭科の授業と生活とのつながりを認識し、実際に生活の中で、学んだことを実践する割合が増えた。このことから、身に付けた知識・技能を活用し、生活につなげていかすことのできる題材は、生徒自らの課題の解決への糸口となり、より良い生活を送るための関心・意欲を高めることができ、「創造性」を育む有効な学習活動であると考えられる。

また、ワークシートの記述や事後アンケートからも、家庭科の授業で学んだことを継続的に取り入れ、生活にいかす姿が見られ、生徒の生活の充実・向上への変容を確認することができた。家庭科の授業を具体的に生活にいかしていく手立てを提示したことにより、「実践する力」を育むことができたといえる。

このように、生活課題を意識し、問題解決的な生活につながる学習活動を行わせることにより、授業で身に付けた知識・技能を活用させ、生活の中から課題を見出すよう導き、生活の充実・向上につなげさせることができた。

2 今後の課題

家庭の状況が多様化する中で、家庭科の授業と生徒自らの生活実態を照らし合わせて考えさせることは不可欠だと思われる。また、生徒個人で解決できない課題については、学校が家庭と協力しながら解決に導いていくことも大切と考えられる。家庭科の学習を通して、生徒が自ら各々の課題を主体的に解決することができる力を身に付けさせる授業の展開が求められる。

おわりに

ワークシートの記述や事後アンケート等の結果から、短期間で問題解決能力を十分定着させることは難しく、長期的な視野で「問題解決的な学習」を繰り返すことが大切であることを実感した。また、「生徒一人ひとりの生活につながる授業」をさらに改善する必要もあるだろう。そうすることで、生徒は生活のどの場面においても、家庭科の授業と生活とのつながりを認識し、課題を解決することができるようになるのではないだろうか。

本研究は、生徒が自分の生活課題を見だし改善する学習活動として有効であったといえる。社会の変化に対応する力を身に付けさせるためにも、生徒が自らの生活を切り拓いていくために必要な力を常に視野に入れながら、家庭科の授業実践を今後も追究していきたい。

引用文献

- 中央教育審議会教育課程部会 2016 「家庭・技術・家庭ワーキンググループにおける審議の取りまとめ」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/c_hukyo3/065/sonota/_icsFiles/afielddfile/2016/09/12/1377053_01.pdf (2016年12月取得) p. 1
- 文部科学省 2010 『高等学校学習指導要領解説 家庭編』 開隆堂出版
- 土屋喜和 2015 「高校生の家庭科に対する意識—21世紀型能力の育成に向けて—」 (琉球大学『教育学部紀要』第87集) pp. 31-39

参考文献

- 国立教育政策研究所 2012 「理系文系進路選択に関わる意識調査—学校属性別集計結果の概要—」
<https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/zokuseichi-report.pdf> (2016年12月取得) p. 76
- 中央教育審議会教育課程企画特別部会 2015 「教育課程企画特別部会 論点整理 補足資料」
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afielddfile/2015/09/24/1361110_2_3_1.pdf (2016年12月取得)
- 中央教育審議会 2016 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/c_hukyo0/toushin/1380731.htm (2016年12月取得)
- 岡崎隆子 2014 「主体的に食生活を営む力を育成する高等学校家庭科の食育指導に関する研究—他教科の視点を取り入れたアクティブ・ラーニング型授業を通して—」 (やまぐち総合教育支援センター平成26年度長期研修教員研修報告書)
- 筒井恭子 2016 「家庭科における創造性を育む学習指導」 (東洋館出版社『初等教育資料』通巻937号) pp. 24-27
- 中村祐治・堀内かおる・岡本由希子・尾崎誠 2006 「これならできる 授業が変わる 評価の実際 『関心・意欲・態度』を育てる授業」 開隆堂出版
- 吉原崇恵 2010 『生活を科学し、実践する力を育てる 授業づくり 子どもがいきる家庭科』 開隆堂出版